

## ▼特集

### ナチズム研究の展望…「民族共同体」の問題を中心に

——ドイツ現代史学会第三八回大会シンポジウム——

## ナチ「民族共同体」論の射程

——道徳・感情という視点から——

小野寺拓也

### 1 はじめに

「ナチ独裁下の社会構造史において、近年民族共同体という概念ほど活発に議論が行われている概念はない」（M・シュテーパー、B・ゴツト<sup>①</sup>）。

『第三帝国』の歴史を語るさいに、『民族共同体』について触れずに済ませることは今日ほとんど不可能である」（N・フライ<sup>②</sup>）。

「伝染病のように広がっている」「インフレ的である<sup>③</sup>」とも揶揄されるほど、近年のナチズム研究における「民族共同体」（以下VGと略す）論の広がりには目を見張るものがある。VGと名のついた論文集、モノグラフがとくに二一世紀に入ってから急激に増加しており、ドイツ人研究者も、このテーマに関する研究文献は見通しがきかないほど多いと漏

らすほどである<sup>④</sup>。

本稿ではまず、VG論が隆盛を極めている研究史上の背景を指摘した上で、この議論を利用することによって得られる視座を六点指摘する。その上で、VG論に対する批判とそれに対する反論を紹介する中で、VG論には今後どのような可能性があるのか検討する。次に、VG論において近年とくに研究が活発な道徳・感情という視点に着目し、この視点がVG論やナチズム論に何をもちたらしうるのかを考察したい。

### 2 「民族共同体」論の射程

すでに二〇一二年の拙稿でも述べたように、ナチズム研究は現在「揺り戻し局面」にあると言える<sup>⑤</sup>。すなわち、六〇年代までの「意図派」、八〇年代までの「機能派」、九〇年代以降の「賛同に基づく独裁」論と来て、現在はその九〇年代に対する揺り戻しである。九〇年代のナチズム研究は、「現場」における人々の体制に対する同意・協力を「ミクロ」な視点から浮き彫りにしたものの、それをやや一面的に強調しがちであったのではない<sup>⑥</sup>。空襲、追放、性暴力など被害者としてのドイツ人の側面にも目を向ける必要があるのではない<sup>⑦</sup>。同じようにミクロな次元に着目すれば、「ドイツ礼」をすることや、冬季救済事業・「一鍋料理の日」で募金をすること、学校やヒトラー・ユーゲントにおける画一化の圧力など、人々にかけられていた「強制」や同調圧力も見えてくるのではない<sup>⑧</sup>。人々がナチ体制から物質的・経済的利益を得ていたことは、体制に対するイデオロギー的支持と切り離して考えるべきではない<sup>⑨</sup>。人々の非同調的な、矛盾に満ちた行動に再び着目する必要があるのではない<sup>⑩</sup>、といった指摘がなされるようになってきている。その意味

で、旧稿で述べたように現在は、膨大な実証的データを踏まえて、「被害と加害の重層性」がどのように結びついていたのか、その全体像を明らかにする「総括段階」にあると言える。D・シユミーヒェン＝アッカーマンも次のように指摘している。

「事実、今必要なのは、ナチ体制の統合力に対して投げかけられた問いについて、実証的に申し分のない模範的な個別研究をもとに議論することである。体制の支配装置や抵抗、迫害に関する従来の研究は、その多くの重要な点において依然として有効である。したがって重要なのは、それに全面的な反論を加えるのではなく、長らくほとんど注目されてこなかった側面についてこれを補うことである」<sup>⑩</sup>。

研究史を否定するのでも塗り替えるのでもなく、よりバランスの取れ、膨大な「エビデンス」を可能な限り統合的に説明でき、新たな視座を提供しようという概念。それが、本稿で論じるV G概念に他ならない。「包摂」と排除、ミクロな事例とマクロな全体構造、規範と実践をすべて視野に入れうるV G概念の背景には、このような研究史上の要請がある。

それでは、V Gという概念を用いることによって、どのような視座を得ることができるのだろうか。ここではシュテーパー、ゴットー、P・ロンゲリヒ、F・バヨール、M・ヴィルト、J・シュトイヴァーなどの整理に依拠しながら、六点指摘しておきたい。

第一に、V Gは現実に存在したものというよりは、「想像の秩序」だったということである。ナチ体制においても依然として亀裂や不平等が

厳然と存在しており、V Gはプロパガンダが広めようとした神話に過ぎないというのは、七〇年代までのナチズム研究の多くが指摘してきた点である<sup>⑪</sup>。しかし近年の研究で強調されるように、V Gは理念として現実を大きく動かす力を有していた。V Gは具体的な政策を正当化する役割を果たしていたし、社会のほばあらゆる領域に適応可能なラベルであり、概念としての汎用性が大きかった。従って、多くの人々がナチ体制との接点を何らかの形でもつことが可能であり、ほかのどの概念よりも強力にドイツ人の動員を可能にするものだった。その意味でヴィルトとバヨールも主張するように、「一九三三年以降社会的推進力を解き放ち、ドイツ人を動員した」要因として、V G以上に「分析上の価値」がある概念はおそらくない<sup>⑫</sup>。

第二にV Gは、輝かしい未来を約束するものでもあった。個人の幸福を現実のものにする前提としてV Gが指定され、そこに参画することによって人々は社会的上昇のチャンスをつかむことができた。一鍋料理の日や党大会への参加、母親名誉十字章の授与といった象徴的行為によって、その参画が具体的な形を帯びることになった。

第三に、V Gは「敵」と「味方」の明確な区別を可能にした。誰が「包摂」の対象となり誰が「排除」されるのかの方向付けを与えたのがV Gであり、包摂される側に対しては様々な物質的・精神的利益を与え、排除される側に対しては殺害にまでいたる暴力が行使された。ただし、ユダヤ人商店で買い物をした人々やユダヤ人と交際した女性に対する暴力、ポーランド人などの「民族リスト」による同化政策など、その基準は完全に明瞭なわけではなく、流動的なものでもあった。そのため、「包摂」と「排除」をめぐる線引きはたえざる交渉プロセスでもあった。

第四にV Gは、個人にとっての参照枠組み、根拠付けとして機能した。そもそもV Gはナチ特有の概念ではなく、ヴァイマル期においてはあらゆる政治的陣営においてV Gという言葉が利用されていた。<sup>14</sup>階級や宗派、地域的な対立やエゴイズムを克服しドイツ人の一体性と「平等」を掲げるV Gは、どの勢力にとっても魅力的な概念であった。そのため、V Gは誰もが自らの利害を押し通すために利用することができる、複数性を帯びた開放的な概念であり、人々の「戦略的な行為やコミュニケーション」にとって理想的な参照点<sup>15</sup>となった。もちろんそのことは、V Gというあるべき理想と目の前の現実がズレているという批判へと人々を向かわせる契機にもなりえた。

第五に、V Gにおいては行為・実践という次元が重要な役割を占めていた。すでに述べたようにV Gは目の前の現実というよりも「輝かしい未来」を約束する「想像の秩序」であり、そうしたナチ的ユートピアを日常において実現しようという呼びかけであった。そこでは口先の同調だけではなく「行動」することが要求され、V Gは「行為の社会主義」たるべきとされた。「人種恥辱」とされたユダヤ人男性やドイツ人女性に対する街頭での公的な辱めや、ユダヤ人商店で買い物をしているドイツ人の同じく氏名や住所をさらす「シュトゥルマー掲示板」<sup>16</sup>、カーニヴァルの出し物でのユダヤ人に対する嘲笑など、日常実践を通じてV Gは「現場」で創られていった。そもそもV G概念自体が多義的で曖昧だったため、その具体化と社会的折衝がつねに必要とされたのである。<sup>18</sup>その意味でナチ体制は「参加の独裁」(S・ライヒャルト)でもあった。<sup>19</sup>

第六に、V Gは単に観念上の理想であっただけでなく、少なくとも一時的には「感じられた現実」(ロンゲリヒ)でもあった。<sup>20</sup>大規模集会、冬季救済事業、「ドイツ礼」などによって人々には、現実には社会的不

平等が存在し続けたにもかかわらず、平等であるかのように感じる事ができたし、そのことが体制への支持の重要な要因となった。また、V Gの具現化にさいしてナチ党が果たした役割も見逃すことができない。地区、細胞、街区といったナチ党の下部組織は、結婚をめぐる問題や隣人との争い、家賃の問題などについて住民からの苦情を受けつけ、その仲裁役を買って出たり、戦死者や行方不明者についての情報を伝達したり、家屋を失った人の住宅を用意したり、出征兵士家族の世話をするなど、住民の「包摂」を現場において試みていた。その一方で、政治的敵対者や外国人労働者・捕虜の監視、ユダヤ人商店のボイコットや「アリア化」、ユダヤ人への身体的暴力、家屋などの破壊など、現場における「排除」にも党組織が直接関与していた。<sup>21</sup>

### 3 「民族共同体」論への批判と展望

しかしこうした議論については、次のような批判や疑問がある。第一に、すでに述べたようにV G概念があまりにも「インフレ的」に使われているという点である。<sup>22</sup>「民族共同体」と銘打った論文集を紐解けば、そこにはナチ体制における消費、党大会や収穫祭などの式典、ナチ党や党組織、司法、建築や都市のイメージ、移住政策、SA(突撃隊)による暴力、小学校教師、ジェンダー史、農業史、サッカー、結社からのユダヤ人の排除、社会的統制と動員、戦後の集合的記憶など、ありとあらゆるテーマが混在しており、こうした批判を裏付けているようにも見える。V Gがこうしてあらゆる場面で使われるとなると、伝統的な批判、つまりV Gというプロパガンダと現実とを混同しているのではないか、本当にV Gは存在していたといえるのか、という批判にも理があるのか、

はないかと思われる。E・ハーヴェイが指摘するように、VGが存在したということを前提に問いを立ててしまえば、ありとあらゆる公的・私的な発言にVGを読み込むという、倒錯した状況にもなりかねない。<sup>26)</sup>

第二は、包摂と排除の双方を考察対象にするといいつながら、すでに述べたようにその多くが「包摂」に関する内容になっていること、そのさい「包摂」の定義が曖昧で、安易に同意や賛同と同一視されやすいことへの批判である。党の式典や防空訓練への参加から、ユダヤ人などへの暴力行使やそれへの賛同にいたるまで、ありとあらゆることがVGへの「包摂」の枠組みに組み込まれており、はつきりと抵抗の意を示した人びと以外はすべて「加害者Täter」に色分けされているのではないかと上からの暴力、強制という側面が軽視されてはいないか。人びとの間に広範囲に存在した不同意や亀裂を軽視してはいないか。あらゆる言動に「抵抗」を読み込んでいた、七〇年代から八〇年代にかけての抵抗研究を裏返しただけではないのか。<sup>27)</sup>

第三の批判は、理論と実証の緊張関係をめぐるものである。ルーマンなどに依拠して、包摂と排除は相互補完関係にあり、何かを包摂することとは別の何かを排除することを前提としているのであって、『排除』のない『包摂』はない<sup>28)</sup>、と論じることには理解しやすすい。しかしこうした「包摂と排除の弁証法」(S・O・ミュラー)とでも言うべきメカニズムは、経験的事実によっても実証できるものなのだろうか。さらにこれを敷衍してT・キューネのように、「共同体への願望、帰属経験、集団というエートスは、大量殺戮の基盤となった。ホロコーストに荷担しこれを支持することは、ドイツ人に対して特有の国民的帰属意識を与えた。ドイツ国民はホロコーストに荷担することによって、自ら

を発見したのだ」と、暴力への関与とVGへの帰属が骨がらみになっていると論じることが、実証的に耐えうるのだろうか。<sup>27)</sup> こうした議論は理論偏重の演繹的解釈に陥る危険性はないか。ホロコーストとVGの日常の実践につねに連関があつたと言えるのか。<sup>28)</sup>

こうした批判や疑問に対して、研究者たちは次のように応えている。まず第一の批判については、VG概念の意味はあくまで「発見的価値」(フライ)にあるのであって、VGが存在することを前提にすべてを説明しようとするものではないこと、そしてすでに述べたようにVGは現実というよりも、秩序観念、参照枠組み、感情といった次元に存在していたことが指摘されている。そもそもVGという概念は、それが生まれた一九世紀の時点からすでに、今日の前にある現実に向けられたものではなく、将来に向かってこれからつくっていくべきものと考えられていた。<sup>30)</sup>

第二の批判については、同調、参加に力点を置く概念であることは間違いないものの、強制や暴力との緊張関係の中で論じらるべきことは当然であると、多くの研究者は指摘している。言うまでもなくナチ体制においては一定の発言が完全に封じられており、VGをめぐる解釈の幅といつてもあくまでそれは体制によって許容される幅であつて、許容されない解釈はすでに排除されたことに留意する必要がある。<sup>31)</sup> ロンゲリヒの整理によれば、政権獲得当初のVGは多分に強制的画一化と抑圧によるものであつた。一九三〇年代半ばまではVGについては一定の解釈の幅が存在したものの、一九三六/三七年の軍需生産拡大以降それに制限がかけられるようになり、開戦以降は人種主義的な差異や排除が重要になつていった。VGは「戦闘共同体」へと変質し、大戦後半になると、敗戦後裁かれるのではないかという恐怖感によってVGの維持が図られる

ようになる。<sup>32)</sup>

また、集団的な規範としてだけでなく、V Gが個人に及ぼした影響を考慮すれば、別の側面が見えてくる。H・クノツホによればナチ体制の矛盾は、様々な抑圧によって共同体的な連帯関係の根本を破壊しておきながら、その結果利己心によって動くようになった人々のあいだに、合目的性とイデオロギーによって同盟関係を作り上げさせたことにある。

しかしそれによって、排除、破壊、暴力へと歴史上例を見ないような規模で、人々を関与させることに成功したのだという。<sup>33)</sup>拙著でもすでに述べた「被害と加害の重層性」やアトム化と重なる問題意識であり、今後解明されなければならない重要な論点である。<sup>34)</sup>

第三の批判については、C・ブラウニングは、ヨーロッパ・ユダヤ人を殺害するという考え自体は、V Gという人種的な排他的な共同体に内在的なものであり、両者に強いイデオロギ的なつながりがあると主張する。またユダヤ人迫害や最終的な殺戮をナチ体制が実行し、それに必要な動員や同意を得るうえでV Gという呼びかけは重要な手段であったかという点については、外務省でヴァンゼー会議に参加したマルティン・ルター、マダガスカル計画を取りまとめたフランツ・ラーデマツハーのように、能力に応じて地位が得られるという、ナチ体制以前には考えられなかったV Gの恩恵を受けてユダヤ人問題に関して権力をふるった人々がいたこと、自らが「戦闘共同体」の一員となることでユダヤ人がその敵として「軍事化される」というメカニズムが、セルビアやベラルーシで「パルチザン」掃討にあたった国防軍将校や、第一〇一警察予備大隊の「ふつうのドイツ人」にもみられることをブラウニングは指摘しているが、<sup>35)</sup> 今後はほかのさまざまな事例による検証が必要であろう。

以上の議論を踏まえると、V G論にはとくに三つの可能性が秘められているように思われる。第一にV G論には、多くの研究者が指摘しているように、従来の社会構造史を文化史・経験史の次元へと拡張する役割が期待されている。<sup>36)</sup> 政治史や制度史、経済史などを、現場や「実践」、「主体」といった日常史が得意とする領域などと切り離すことなくトータルな視点で把握することを、V G論は射程に入れているからである。

第二に興味深いのが、すでに述べた「個」とV Gをめぐる複雑な関係である。一般的に、ナチ体制は私益よりも公益、個人よりも全体が優先される体制であり、集団主義のなかで個性や自己実現、個人的幸福などは圧殺されていたと理解されることが多い。しかしM・フェルマーによれば、それはナチ体制末期から第二次大戦後初期にかけて人々がナチスから決別していく過程で浸透していった認識であって、事実上即したものではなかった。むしろこの「個」と全体が特定の形で両立しえたのがナチ体制であったと、フェルマーは指摘する。一九世紀末以降の大衆社会と個人化の流れのなかにあつて、「個」それ自体を否定するのではなく、合法的な「個」と違法な「個」を識別して「受け入れられる形の個」を提示することに、ナチ体制の目論見はあつた。すなわち「生存闘争」としての人生、個人的な成功を収めるためにはリスクを取る英雄的な生き方、指導者原理に基づく自己実現は肯定される一方、エゴイズムをむき出しにして自己利益を追求し、本心を偽る違法な「個」はユダヤ人と結びつけられ、否定された。このようにナチズムの中核的メッセージはむしろ、「個と共同体は両立しうるし、相互補完的ですからある」ということであつた。<sup>37)</sup> ナチ体制は個人的業績を認知し、社会的上昇とそれへの意欲をかき立てたが、<sup>38)</sup> それは効果的に支配をすすめるうえで雇用や住居、家族を安定させ、物質的な安寧を一定程度保証する必要があつた

からでもある<sup>93</sup>。その意味で「V G概念は本質的には集合的なものだが、究極的には個人に対して向けられてい」たと言える<sup>94</sup>。こうして合法的な「個」が体制によって提示されたことで、そこから逸脱しない限りにおいて人びとは新たな行動可能性を得ることもなった。その一方で、自分が従っているこうした規範に他人が従っていないと感じた場合、それは密告などのかたちで排除へと向かうこともあり得た。その意味でナチ体制は、他人がV Gに合致しているかどうか、つねに気になる体制でもあり、その意味でドイツ国民はつねに「留保つきの民族同胞」という状況に留め置かれていたということでもあった<sup>95</sup>。包摂・排除両方のベクトルをはらんだ動的な緊張関係を、V Gと個人の関係から読み取ることができよう。

そして第三の可能性が次節で取り上げる、道徳・感情という次元への問題の拡張である。

#### 4 道徳・感情から見るナチ体制

すでに述べてきたようにV G概念が「想像の秩序」として人びとの参照枠組みとなり、現場における行為・「実践」を通じて包摂や排除へと繋がっていったのだとすれば、人びとに対して具体的にどのような参照枠組みが提示されていたのか、そして人びとはそれをどのように受け止めたのかという点が問われなければならない。そこで一つの切り口となるのが、近年V G論において研究が増加している「道徳」という視点である。

道徳は一般的に、暴力や強制によるものではなく内側から生じるものとされる。その意味で道徳はR・ゲロスが論じるように、「ナチ民族

共同体の内的結合力」となりうる要素であった<sup>96</sup>。具体的には、まともstandingであること、尊厳、名誉、義務、忠誠、犠牲への用意、私益よりも公益、戦友意識、恥辱といった観念（芝健介が言うところの「特有のメンタリティ」<sup>97</sup>）の集合体であるが、こうした「ナチ的良心」（K・クーンズ）を人びとが内面化することによって、暴力的な排除を含む行動も道徳的に正しいものだと考えることが可能になる。

ただしナチ体制における道徳は、「汝殺すなかれ」に代表されるような、どの時代・地域にもあてはまるべき価値規範ではなく、あくまでV G内部でしか通用しないものであった。このような道徳のありようを、W・コーニツァーは「普遍的特殊主義 Universal Particularismus」という言葉で説明する<sup>98</sup>。確かにどの民族、人種にも道徳はある。それぞれの道徳は部分的には一致するが、部分的には相違し、結局の所両立することができない。普遍的な道徳があるなどというのは、ユダヤ人が主張する虚構にすぎない。諸個人はそれゆえ、所属する人種や民族の道徳を内面化しなければならない。なぜならそれなしには、真の「民族性」「共同体」に到達しえないとされるからである。こうして道徳は普遍性から切り離され、道徳の根源、正当化の最終的な根拠は集団に置かれることになる。道徳はあくまで人種に基づくV Gの中でのみ適用されるものとなり、この道徳によって正当化される価値規範や実践は、外部からの合理的な批判も他の道徳との比較も受け付けないようになる。道徳は「本能と直感」によって感知したり体験によって習得するものであった<sup>99</sup>、理性によって学び取るものではないものとされる。

ゆえに、外部や排除される人々に対する隣人愛はもはや「大罪」となる。同情を自らに禁じ、仮借のない暴力をふるうことが「道徳的」な行為とされるようになる。「自分の帰属する集団を優先し、その美点や長

所を強く前面に押し出す時、潜伏する人種憎悪が頭をもたげてくる。  
「悪はまじりけのない純粋な民族の善として現れる」(クーンズ)<sup>(48)</sup>のである。S・ナイツェルとH・ヴェルツァーはさらに先鋭的に、「ナチ社会は非道徳的になったわけではなく、大量殺戮が起こったのも、広く考えられているような道徳的退廃ゆえではない。むしろ、『ナチ的道徳』が驚くほど急速かつ徹底的に確立されたからである」とまで主張する。<sup>(49)</sup>  
「ナチ的道徳」という一枚岩的な道徳システムが存在したのかどうかはさておき、集団内部に対しては「道徳的」である人間が、その外部に対する暴力に対してはいかなる良心の呵責も見せない例は、枚挙にいとまがない。「ユダヤ民族の根絶」にもかかわらずSS隊員は「まとも」なままであり、内面や魂、性格に損傷は受けていないとしたヒムラーの「ポーゼン演説」。ユダヤ人の死体が「モノ」としてしか見えなくなっていたという絶滅収容所長フランツ・シユタンゲル。<sup>(50)</sup>  
と同時に道徳は、人々の行動を積極的の下支えする動機としてではなく、自らの行動を(時に後付けで)正当化し、「政治的正しさ」から逸脱しないための参照枠組みともなる。道徳とはその意味で、「社会的圧力にもとづく行動の規則性」でもある。<sup>(51)</sup> 何に憤るべきか、何を恥ずかしと思うべきかが集団的に規定され、実際に憤りや恥といった道徳的感情が相互に発揮されることで、それが圧力として機能する。他方、道徳は法と違って外部から強制することができず、あくまで内面に基づくものとされる。しかもナチ体制下では「健全な民族感情」といったかたちで「法の道徳化」が推し進められ、強制と自発性の境界が意図的に曖昧なものどされた。<sup>(52)</sup> この強制と自発性のハイブリッド性にこそ、道徳という次元の興味深さがある。<sup>(53)</sup> 「社会的実践をつぶさに見てみると、体制が直接的強制を行使したことは滅多にないことがわかる。概して人々に対

する働きかけは間接的なものであり、枠組みとなる原則を「体制の側から」明快に説明することで人々はそれによって方向性を求め、限界を設定することでそのなかで人々はかなり自立した行動をとることができた」(バヨール)<sup>(54)</sup>。

このように「道徳システムは、政治的・イデオロギー的な確信よりも深い次元で、間主観的に訓練され、主観的に受け継がれた行動様式や感情、自発的な判断や反応形式へと埋め込まれている」(グロス)<sup>(55)</sup>。ナチズムを従来以上に「特定の価値・道徳秩序」として捉えることで、人種主義や反ユダヤ主義、ナシヨナリズムといったイデオロギーの分析を超えた、より深い次元にまでナチ体制の構造を理解することが可能になる。<sup>(56)</sup> さらに、すでに述べたようにナチズムにおいては、直感、本能、感情、「魂」といったものが重視され、口先の議論ではなく行動することが何よりも求められていた。その意味で、「ナチズムは生活観 *Lebensauffassung*」であって、学問ではな」(W・ビアラス) かつたとも言える。<sup>(57)</sup> ナチズムそのものがそうした言語化しがたい暗黙の了解、共通認識にその多くを拠っており、そうした暗黙知を共有できるものだけがV Gの仲間であってそうでないものは蔑視、排除するという構造になっていたのだとすれば、政治的・イデオロギー的な次元以上にそうしたメカニズムこそが明らかにされなければならないだろう。

言語化しがたい暗黙知によって包摂と排除が行われるという意味で、道徳と並んで重要な視座となりうるのが「感情」である。近年欧米における感情史研究の隆盛にはめざましいものがあるが、道徳と同様感情においても、集団的な側面と個人的な側面は複雑に絡み合っている。ある集団において感情がどのように表現され、感情にどのような意味が与えられ、どのような感情が推奨されるかは抑圧されるのかという前者

と、それが個人のレベルでどのように現れ実践され、どのような効果を生じるのかという後者<sup>85)</sup>。後者は前者に大きく規定される一方、実践やその効果を通じて前者に影響を与えることもあれば、前者のもくろみから外れて統制不能になることもある。道徳以上に身体性と密接な関係をもつ感情は、それを一定の方向性へと誘導し動員することができれば体制にとつて非常に有効な政治的資源となりうるが、不定形で揮発性も高いゆえに、安定的に統制することが難しい<sup>86)</sup>。

それでもナチ体制が、そうした「感情政治」を社会の様々な領域において推進していたことは間違いない。党大会などの祝典やパレード、プロパガンダ、ラジオ・映画、音楽、青少年政策、あるいは旗、制服、勲章などを通じて、人びとの感情面での統合を図っていた。ヴィクトール・クレンペラーの『第三帝国の言語』も随所で指摘するように、「熱狂的」「戦闘的」「壮烈な」といった「集団的熱狂の言語」が日常生活の隅々にまで浸透していた<sup>87)</sup>。「ドイツ史においてかつてこれほど国家が市民の感情へと意識的に働きかけ、感情をつくりだし、活性化させて政治的な目標へと方向付ける包括的なメカニズムを考え出したことはなかった」(フレーフェルト<sup>88)</sup>)。

そもそもVGという観念自体が「情動的統合」を前提としており、VGには「社会的平等」という感情を広める」手段としての役割があった<sup>89)</sup>。亀裂や社会的不平等が現実には存在するにもかかわらず共同体的な一体感を演出するためには、それを埋め合わせるための「感情政策」が不可欠だったからである。たとえば、体制にとつて思惑通りには進まない人びとへの消費財の供給を埋め合わせるためには、「最終的な勝利」の後には消費が可能だと約束し、人びとの欲求や個人的な幸福がきちんと顧みられているという感覚を提供することが必要であった<sup>90)</sup>。B・クンドル

スは、こうした「バーチャルな消費」という身振りが従来の研究で十分に考慮されていないことを指摘している<sup>91)</sup>。D・ミューレンフェルトが指摘するように、今すぐ解決できるようなには思われない不平等や距離感があるからこそ、平等と一体感を約束するVGという象徴上の政治が機能するのである<sup>92)</sup>。

道徳や感情という視点をナチズム研究に持ち込むという試みはまだその端緒にすぎたばかりであり、方法論的にも手探り状態であることは否めない。しかしこの視座は、すでに述べてきたVG論の課題、すなわち「想像の秩序」、未来像、「敵」と「味方」の識別、個人にとつての参照枠組み、行為・実践、「感じられた現実」といった問題に深く分け入ることで、従来の社会構造史を文化史・経験史への次元へと拡張し、より包括的な視点で社会を把握すること、集団的な規範や強制と「個」の複雑な関係を理解することを可能にするものである。ナチ体制と骨がらみになってきた言語化化したい暗黙の了解、共通認識を深層からえぐり出すこと。それが、最大の目標となるであろう。

## 5 おわりに

本稿で述べたように、VGはナチ特有の概念ではない。一九世紀末にこの概念は政治的言説において徐々に重要性を増し、第一次世界大戦において「場内平和」を経験したことや一気にならな一般化し、その後もこの「八月の体験」が理想化された形で想起されることになる<sup>93)</sup>。また第二次大戦末期にドイツ人が経験した空襲や追放といった被害は、「困窮共同体」「運命共同体」「犠牲者共同体」としてそれを共に堪え忍び、戦後の復興に共に取り組んでいくというかたちで、人びとの間に共同体感情を

生み出していった。VGという言葉から人種主義や民族至上主義の排他的な色合いが消えたとはいえ、戦後においても「総統なき民族共同体」は存続していたとも言える。<sup>(8)</sup>

VGという概念によって分断した国民を一つに団結させ一定の方向へと動員しようとする動きは、ドイツに限られたものではない。戦間期には北欧、オーストリア、スイスなどでこれに対応する言葉が使われていた。たとえばスウェーデンでは共産党を除くすべての政党がこれを用い、VGという言葉のナチ色が濃くなってくると、かわりに「民族の家」という言葉がほぼ類似の意味で使われた。ドイツに比べればこの言葉が政治的に利用される頻度は低く、排除に重点を置くナチとは違って純粹な包摂概念として用いられ、こうした言説を使って政治空間を支配していたのはファシズムではなく民主主義政党であったという違いがある一方で、階級を超越したコンセンサス、全社会的な調和というメッセージにおいて両者は共通していた。<sup>(9)</sup>

本稿で述べてきたように、VG概念は汎用性が高く曖昧であったがゆえに多くの人びとを糾合することが可能であった。「賛同に基づく独裁」も、そうしたエネルギーなしには考えることができない。通時的・共時的な比較の視点を通じてこのエネルギーの本質を明らかにする作業も、今後は必要になるであろう。

#### 【付記】

本稿は、二〇一五年九月二〇日に神戸大学において行われたドイツ現代史研究会における報告に、加筆・修正を加えたものである。コメントーターの川喜田敦子氏、高橋進氏、司会の木村靖二氏からは貴重な指摘をいただいた。深く感謝申し上げます。なお本研究はJSPRS科

研費 25284148 の助成を受けたものである。

#### 注

- (1) M. Steber / B. Goto, „Volksgemeinschaft im NS-Regime: Wandlungen, Wirkungen und Aneignungen eines Zukunftsversprechens“, in: *Trennjahrshefte für Zeitgeschichte* 62 (3), 2014, S.433.
- (2) N. Frei, „Die nationalsozialistische „Volksgemeinschaft“ als Terror und Traum“, S.1. [https://www.bpb.de/system/files/dokument\\_pdf/20130225\\_Dokumentation\\_Vortrag%20Frei\\_HolocaustKonferenz\\_aor.pdf](https://www.bpb.de/system/files/dokument_pdf/20130225_Dokumentation_Vortrag%20Frei_HolocaustKonferenz_aor.pdf) (二〇一六年三月二十九日確認)
- (3) U. Herbert, „Holocaust-Forschung in Deutschland: Geschichte und Perspektiven einer schwierigen Disziplin“, in: F. Bajohr / A. Löw (Hg.), *Der Holocaust. Ergebnisse und neue Fragen der Forschung*, Frankfurt a.M., 2015, S.66; D. Süß, „Leistung, Aufstieg und Vernichtung“, in: *Trennjahrshefte für Zeitgeschichte* 62 (3), 2014, S.463.
- (4) J. Steuwer, „Was meint und nützt das Sprechen von der „Volksgemeinschaft“? Neuere Literatur zur Gesellschaftsgeschichte des Nationalsozialismus“, in: *Archiv für Sozialgeschichte* 53, 2013, S.487.
- (5) 小野寺拓也「ナチズム研究の現在——経歴史の視点から」『シンポジウム 第五号, 二〇一二年』
- (6) 参照: N. Stargardt, „Beyond ‚Consent‘ or ‚Terror‘: Wartime Crises in Nazi Germany“, in: *History Workshop Journal* 72, 2011; R. Hachmann / S. Reichardt, „Detlev Peukert revisited: Überlegungen zu seiner historiographischen Einordnung“, in: Hachmann / Reichardt (Hg.), *Detlev Peukert und die NS-Forschung*, Göttingen, 2015; M. Wildt, „Die Volksgemeinschaft nach Detlev

- Peukert“, in: Hachmann / Reichardt (Hg.), *Ebd.*; N. Wachsmann, “Rewriting resistance and repression under the Nazi regime: Perspectives on the work of Dellew J. K. Peukert“, in: Hachmann / Reichardt (Hg.), *Ebd.*
- (7) 参照 D. Schmieden-Ackermann, “Social Control and the Making of the Volksgemeinschaft“, in: Steber / Gotto (ed.), *Visions of Community in Nazi Germany: Social Engineering and Private Lives*, Oxford, 2014.
- (8) 参照 F. Bajohr, “Community of Action’ and Diversity of Attitudes: Reflections on Mechanisms of Social Integration in National Socialist Germany, 1933-45“, in: Steber / Gotto(ed.), *ibid.*, 2014.
- (9) Hachmann / Reichardt, a.a.O., S.31.
- (10) Schmieden-Ackermann, „„Volksgemeinschaft“: Mythos der NS-Propaganda, wirkungsmächtige soziale Verheilung oder soziale Realität im „Dritten Reich“? – Einführung, in: Schmieden-Ackermann (Hg.), „*Volksgemeinschaft*“: *Mythos, wirkungsmächtige soziale Verheilung oder soziale Realität im „Dritten Reich“? Zwischenbilanz einer kontroversen Debatte*, Paderborn, 2012, S.19.
- (11) Steber / Gotto, a.a.O.; P. Longerich, „Gemach – bis zu Praxistest“, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 62 (3), 2014; Bajohr / Wildt, „Einleitung“, in: Bajohr / Wildt (Hg.), *Volksgemeinschaft. Neue Forschungen zur Gesellschaft der Nationalsozialismus*, Frankfurt a.M., 2009; Steuwer, a.a.O.
- (12) Steuwer, *Ebd.*, S.489.
- (13) Bajohr / Wildt, a.a.O., S.9.
- (14) Wildt, „Die Ungleichheit des Volks. „Volksgemeinschaft“ in der politischen Kommunikation der Weimarer Republik“, in: Bajohr / Wildt, *a.a.O.*
- (15) Steber / Gotto, a.a.O., S.441.
- (16) Wildt, *Volksgemeinschaft als Selbstermächtigung: Gewalt gegen Juden in der deutschen Provinz 1919 bis 1939*, Hamburg, 2007.
- (17) ムルティナ・ケッセル、小野寺拓也・森田直子監訳「身体化された支配——ナチ期のカーニヴァル」『現代史研究』第五九号、二〇一三年。
- (18) D. v. Reeken / M. Thießen, „„Volksgemeinschaft“ als soziale Praxis? Perspektiven und Potenziale neuer Forschung vor Ort“, in: Reeken / Thießen (Hg.), „*Volksgemeinschaft*“ *als soziale Praxis. Neue Forschungen zur NS-Gesellschaft vor Ort*, Paderborn, 2013, S.21.
- (19) Reichardt, „Faschistische Beteiligungsdiktaturen. Anmerkungen zu einer Debatte“, in: *Tel Aviver Jahrbuch für deutsche Geschichte* 42, 2014.
- (20) Longerich, a.a.O., S.459.
- (21) A. Nolzen, „Totaler Antisemitismus“. Die Gewalt der NSDAP gegen die Juden, 1933-1938/39“, in: Schmieden-Ackermann (Hg.), *a.a.O.*; C.-W. Reibel, *Das Fundament der Diktatur: die NSDAP-Ortsgruppen 1932-1945*, Paderborn, 2002.
- (22) 大久保 洋一 I. Kershaw, „„Volksgemeinschaft“. Potenzial und Grenzen eines neuen Forschungskonzepts“, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 59, 2011.
- (23) E. Harvey, „Eine Utopie mit tödlichen Ausschlussklauseln“, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 62 (3), 2014, S.446. 田中 龍雄 著 ヴィルヘルム・フォン・ヒューペル, „The Volksgemeinschaft and the Problems of Permeability: The Persistence of Traditional Attitudes in Württemberg Villages“, in: *German History* 34 (1), 2016.
- (24) Harvey, *Ebd.*, S.446f.; Steber / Gotto, a.a.O., S.435; Kershaw a.a.O., S.10f.; Herbert, „Arbeiterklasse und Gemeinschaftsfremde. Die Gesellschaft des NS-Staates in den Arbeiten Dellew Peukert“, in: Hachmann / Reichardt (Hg.),

- a.a.O., S.47f.; Herbert, „Volksgemeinschaft“: Gleichheit und Ungleichheit“, in: W. Nerdinger (Hg.), *München und der Nationalsozialismus. Katalog des NS-Dokumentationszentrums München*, München, 2015; Bajohr, „Täterforschung: Ertrag, Probleme und Perspektiven eines Forschungsansatzes“, in: Bajohr / Löw (Hg.), a.a.O., S.168.
- (25) 渡會知子「相互作用過程における「包摂」や「排除」——N・ループンの「ペーニン」概念との関係から」『社会学評論』第五七卷三三号、二〇〇六年、六〇三頁。
- (26) S. O. Müller, *Deutsche Soldaten und ihre Feinde. Nationalismus an Front und Heimatfront im Zweiten Weltkrieg*, Frankfurt a.M., 2007, S.13.
- (27) T. Kuhne, *Belongings and Genocide. Hitler's Community, 1918-1945*, New Haven / London, 2010, p.1.
- (28) Steuer, a.a.O., S.521ff.; Harvey, a.a.O., S.447f.; Frei, a.a.O., S.2.
- (29) Frei, Ebd., S.8.
- (30) Steuer, a.a.O., S.495.
- (31) 参照: L. Raphael, „Pluralities of National Socialist Ideology. New Perspectives on the Production and Diffusion of National Socialist Weltanschauung“, in: Steber / Goto (ed.), *op.cit.*, p.77.
- (32) Longrich, a.a.O., S.462. s. ケラーは一九四四年以降の体制末期にあつて、「一九一八年の敗北」とは異なる状況を目指していたナチ体制にとつて、VG概念が極めて重要な役割を果たしたことを指摘している。S. Keller, *Volksgemeinschaft and Violence. Some Reflections on Interdependencies*, in: Steber / Goto (ed.), *ibid.*
- (33) H. Knoch, „Gemeinschaften im Nationalsozialismus vor Ort“, in: Reeken / Thielen (Hg.), a.a.O., S.50.
- (34) 小野寺拓也『野戦郵便から見ると「ふじろのドイツ兵」——第二次大戦末期におけるドイツ兵と「主体性」』山川出版社、二〇一二年。
- (35) C. Browning, „The Holocaust. Basis and Objective of the Volksgemeinschaft“, in: Steber / Goto (ed.), *op.cit.*
- (36) Longrich, a.a.O., S.462; Süß, a.a.O., S.464; Steuer, a.a.O., S.525; D. Mühlentfeld, „Die Vergesellschaftung von „Volksgemeinschaft“ in der sozialen Interaktion“, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft* 61 (2013), S.830.
- (37) M. Föllmer, *Individuality and Modernity in Berlin. Self and Society from Weimar to the Wall*, Cambridge, 2013; Föllmer, „Was Nazism Collectivist? Redefining the Individual in Berlin, 1930–1945“, in: *The Journal of Modern History* 82 (2010).
- (38) Süß, a.a.O., S.465.
- (39) A. Wirsching, „Volksgemeinschaft and the Illusion of ‘Normality’ from the 1920s to the 1940s“, in: Steber / Goto (ed.), *op.cit.*, p.152.
- (40) Steber / Goto, „Volksgemeinschaft. Writing the Social History of the Nazi Regime“, in: Steber / Goto (ed.), *ibid.*, p.23.
- (41) Föllmer, „Volksgemeinschaft zwischen Bedeutungsvielfalt und Homogenitätsanspruch“, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 62 (3), 2014, S.458.
- (42) R. Gross, *Anständig geblieben. Nationalsozialistische Moral*, Frankfurt a.M., 2010, S.9.
- (43) 芝健介『武装のら——ナチスもうひとつの暴力装置』講談社、一九九五年、一九六・七頁。
- (44) クローディア・クーンズ、滝川義人訳『ナチと民族原理主義』青灯社、二〇〇六年。
- (45) W. Konitzer, „Moral oder „Moral“? Einige Überlegungen zum Thema „Moral

- und Nationalsozialismus“<sup>44</sup>, in: Fritz Bauer Institut (Hg.), *Moralität des Bösen. Ethik und nationalsozialistische Verbrechen*, Frankfurt a.M., 2009.
- (46) W. Bielas, “Nazi Ethics and Morality: Ideas, Problems and the Unanswered Questions”, in: Bielas / L. Fritze (ed.), *Nazi Ideology and Ethics*, Newcastle, 2014, p.56.
- (47) Bielas, *Moralische Ordnungen des Nationalsozialismus*, Göttingen, 2014, S.33, 41, 55f.
- (48) クーンベ前掲書 三七〇頁。
- (49) S. Neitzel / H. Welzer, *Täter. Wie aus ganz normalen Menschen Massenmörder werden*, Frankfurt a.M., 2005, S.56.
- (50) キッタ・セシニー、小俣和一郎訳『人間の暗闇——ナチ絶滅収容所長との対話』岩波書店、二〇〇五年。
- (51) Gross, *a.a.O.*, S.12.
- (52) Fritz Bauer Institut / Konizer (Hg.), *Moralisierung des Rechts. Kontinuitäten und Diskontinuitäten nationalsozialistischer Normativität*, Frankfurt a.M., 2014.
- (53) 参照 Gross, *a.a.O.*, S.218.
- (54) Bajohr, “Community of Action”, p.189.
- (55) Gross, *a.a.O.*, S.13.
- (56) Suß, a.a.O., S.464.
- (57) Bielas, “Nazi Ethics and Morality”, p.31.
- (58) 感情史研究の概要については、以下を参照。森田直子「感情史を考へる」『史学雑誌』第一二五卷三号、二〇一六年；B. Hitzer, „Emotionsgeschichte – ein Anfang mit Folgen“, in: *HSoz-u-Kult* 23.11.2011, <http://hsoz-kult.geschichte.hu-berlin.de/forum/2011-11-001> (二〇一六年三月二十九日確認)；U. Frevert, *Emotions in History – Lost and Found*, Budapest / New York, 2011.
- (59) この問題についての論点整理は、以下を参照。J. Plumper, „Vergangene Gefühle. Emotion als historische Quellen“, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte* 32-33, 2013; R. Schnell, *Haben Gefühle eines Geschichte? Aporien einer History of emotions*, Göttingen, 2015.
- (60) 参照 Frevert, „Glaube, Liebe, Hass. Die nationalsozialistische Politik der Gefühle“, in: Nerdinger (Hg.), *a.a.O.*, S.482. 感情の「諸刃の剣」としての側面についてクリスマスを例に論じたものとして、小野寺拓也『穏やかな』戦場のメリークリスマス 一九四四』『専修史学』第五三号、二〇一二年。
- (61) ヴィクトール・クレンペラー、羽田洋他訳『第三帝国の言語』(上)——*多言語学者のノート*』法政大学出版社、一九七四年、三一頁。
- (62) Frevert, „Glaube, Liebe, Hass“, S.489.
- (63) Frei, „„Volksgemeinschaft“. Erfahrungsgeschichte und Lebenswirklichkeit der Hitler-Zeit“, in: ders., *1945 und wir. Das Dritte Reich im Bewußtsein der Deutschen*, München, 2005, S.114.
- (64) H.-W. Niemann, „„Volksgemeinschaft“ als Konsumgemeinschaft?“, in: Schmiechen-Ackermann (Hg.), *a.a.O.*
- (65) B. Kundrus, “Greasing the Palm of the Volksgemeinschaft. Consumption under National Socialism”, in: Steber / Gotto (ed.), *op.cit.*
- (66) Mühlentfeld, a.a.O., S.828.
- (67) Steuwer, a.a.O., S.495ff.
- (68) M. Thießen, „Schöne Zeiten? Erinnerungen an die “Volksgemeinschaft” nach 1945“, in: Bajohr / Wildt (Hg.), *a.a.O.*, S.170.

(9) N. Götz, „Die nationalsozialistische Volksgemeinschaft im synchronen und diachronen Vergleich“, in: Schmiechen-Ackermann (Hg.), *a.a.O.*, S.66ff.

(おのづから たぐや・昭和女子大学専任講師)

